令和6年1月 18 日　職員会議資料

令和５年度　学校教育自己診断分析

校長　　田 尻　　肇

生徒対象教育自己診断

・ここ数年順調に上昇している**肯定率が多くの項目においてさらに向上した。肯定率の平均は令和２年度 75.3%、令和３年度 79.3%、令和４年度 82.9%、そして今年度が 83.2%であった。**特に、**「学校へ行くのが楽しい」と回答した生徒が 85.7%＜（R4 83.4%　R3 82.9%）＞**と向上したことは嬉しい結果である。

・授業に関する項目は、引き続き高い肯定率を示した。**「授業がわかり易い」(82.0%)＜(R4 80.2%　R3 74.9%)＞**はさらに向上し、**「授業は学力向上に役立っている」(84.4%)＜（R4 84.6%　R3 81.2%）＞、「教え方に工夫をしている先生が多い」(80.9%)＜（R4 80.4%　R3 73.8%）＞、「授業では自分の考えをまとめたり、発表する機会がある」(86.9%)＜（R4 87.6%　R3 78.5%）＞**と、軒並み高い肯定率を示した。

また、他の設問と比べてどちらかというと肯定率が低い、**「授業でわからないことについて質問しやすい」（72.5%）＜（R4 70.1%　R3 65.3%）＞**も徐々に向上してきている。個別最適な学びが進められる中、さらなる向上をめざしたい。　さらに、観点別評価が導入される中、**「評価の仕方や基準について、事前に知らされている。」(92.2%)＜（R4 87.9%　R3 81.6%）＞、「学習の評価については納得できる。」(90.6%)＜（R4 89.9%　R3 87.5%）＞**と、評価に対する肯定率は極めて高く、先生方による丁寧な説明、公平感のある評価に生徒が満足していることが伺える。

今後も、組織的な取り組みを通して、授業力を高めていきたい。来年度から新たなコース制を導入し、「より高い学習にチャレンジする」といった取り組みを開始する。大きな成果をあげるためには教員個々の授業力向上だけに留まらず、教科を軸としたカリキュラム、シラバスの精選が必須である。今後も、自主的、主体的な研修を通し、中長期的なビジョンのもと推進していきたい。

・**「先生は協力して生徒指導にあたっている」(88.6%)＜（R4 87.4%　R3 82.6%）＞、「生活規律や学習規律などの基本的習慣の確立に力を入れている」(82.2%)＜（R4 80.1%　R3 78. 1%）＞**と、生徒指導に関する肯定率は 4 年連続で向上した。日頃から、先生方が一枚岩となりながら丁寧に指導をしている姿、そして生徒の成長を願う思いが生徒にも伝わっていることが伺える。生徒や友人関係が上手く構築できず精神的に不安定な生徒が多い状況の中、今後も担任団を中心に家庭と連携を取りながら、組織的な生徒指導を推進していきたい。

・**「将来の進路や生き方について考える機会がある」(93.9%)＜（R4 93.5%　R3 92.5%）＞は 3 年連続で極めて高い肯定率を示した。**ＨＲや探究の時間を活用したキャリア教育の成果と言える。

・**「人権について学ぶ機会がある」(88.9%)＜（R4 87.4%　R3 85.6%）＞**も高い肯定率を維持することができた。生徒全てが、安全で安心した学校生活を送ることができる学校であるためには、「自己肯定・他者理解」両面からの人権教育は必要不可欠である。「部落差別問題」などの不易の課題から、「性的マイノリティー」などといった日々情報がリニューアルされるような課題まで、多岐にわたる人権教育をおこなっていくことは高校教育の根幹のひとつである。

・今年度の重点課題であった**「担任の先生以外に相談できる先生がいる」(65.7%)＜(R4 62.3%　R3 59.0%)**＞は、徐々にではあるが、順調に向上している。今年度からクラス運営に副担任が関わる取り組みを開始したが、来年度以降もさらなる向上に向けて、生徒に対する教員の関わりや寄り添いを深めていきたい。

・**「先生は、いじめや相談事について私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる」(89.7%)＜(R4 85.6%　R3 85.3%)**＞は、さらに高い肯定率を示した。進む生徒の多様化に加え、コロナの影響により精神的な課題を抱える生徒が多く存在する中、安心安全な学校生活が送れる環境づくりは大きな課題である。引き続き、組織対応を軸にしながら、「生徒相談体制」や「いじめ防止に向けた組織力」のアップを図っていきたい。

・28 項目中唯一 2 年間連続で肯定率が下がったのは、**自分は部活動に積極的に取り組んでいる（72.9%）＜R4 76.5%　R3 79.7%）**＞であった。少なからずコロナの影響があり、中学校で部活をやめた生徒も多いのではないかと想定される。生徒指導部（自治会担当）が中心となり、活性化を図れなければならない。

＜今後の課題として＞

・**国際交流（69.2%）＜R4　70.0%＞　、地域連携（58.3%）＜R4　63.0%＞**に関する肯定率は昨年度より低下した。来年度に向けた重点課題といえる。本校の特色である部分でもあるので、授業や部活動を通し活性化を図りたい。

保護者対象教育自己診断

・２４項目中１６項目の肯定率がアップした。また、**全設問の肯定率の平均も 82.9%(R4　82.7%　R3　80.1%)に向上した。**

・**「桜塚高校には他の学校にない良さ（特色）がある」(82.3%)＜R4 79.8%　R3　76.0%＞**はここ数年順調に増加している。８割を超える結果は教職員の元気に繋がる結果である。授業料無償化が導入される中、学校の特色づくりは喫緊の課題である。引き続き、魅力ある教育活動を進めていきたい。

・**「桜塚高校の教育課程（カリキュラム）は生徒の進路保障・自己実現につながっている。」(84.0%)＜R4 79.8%　R3　76.3%＞**が大きく向上した。改編した GS コースを軸に、引き続き第１志望の進路実現を果たすための魅力あるカリキュラムを編成していきたい。

・**「桜塚高校は、将来の進路や職業について適切な指導を行っている」(86.4%)＜R4 85.0%　R3 83.7%＞、「桜塚高校は、進路に関する情報提供に努力している」(84.9%)＜R4 84.3%　R3 79.1%＞**と進路指導に関する肯定率は高いレベルで順調に向上している。オンラインでの開催（オンデマンドの配信）も含め、進路説明会を丁寧に行う等、進路指導部を中心とした丁寧な取り組みの成果と言える。

・**「桜塚高校のいろんな教育活動を通して子どもの成長を実感している」(89.2%)＜R4 87.2%　R3 84.4%＞**

が極めて高い結果になったことは、本校の教育活動がニーズに合致していることを示す嬉しい結果である。

・**「桜塚高校はいじめや相談事について子どもが困っているときことがあれば真剣に対応してくれる」**（84.5%）＜R4 84.2%　R3 81.3%＞の肯定率が順調に向上している。教員による生徒への寄り添いが保護者に伝わっている。社会に変化とともに生徒の多様化が進む中、またコロナ渦により不安定な生徒が増える中、引き続き、生徒が安心安全に通える学校づくりをめざしていきたい。

・**「子どもは文化祭・体育祭等の学校行事に積極的に参加している」**（92.6%）＜R4 90.5%　R3 ―＞は極めて高い肯定率を示した。**「子どもは家庭でよく話をする。」**（82.9%）＜R4 77.3%　R3 76.7%＞、**「子どもの様子は、よく把握している。」**（86.9%）＜R4 81.1%　R3 77.4%＞も順調に登場しており、学校で行事を楽しむ生徒の様子が保護者に伝わっているのではないだろうか。

＜今後の課題として＞

・最も低かったのは**「桜塚高校の施設・設備は学習環境の面で満足できる」**（54.0%）＜R4 59.4% R3 56.5%＞の肯定率であった。特に自由記述ではトイレの改装について要望が多く見られた。学校サイドでの改善は難しい。引き続き、教育庁に現状を伝えていきたい。

教職員対象教育自己診断

母数が少ないため有意差が何ポイントであるかという判断は難しいが、昨年度と比べ（5ポイント以上）大きく増加・減少した項目に着目し総括することとする。

・**「校則が生徒の実態や人権尊重の立場から適切であるかどうか、検討を加えている」**（81.3%）＜（R4 73.6% R3　78.3%）＞　が、昨年度から7.7ポイント上がった。生徒を取り巻く環境が大きく変化する中、令和4年12月に「生徒指導提要」が12年ぶりに改訂され、課題対応の側面のみならず生徒の発達を支えるような生徒指導の側面が求められている。今後も人権尊重のもと、生徒自身がその根拠や影響を考え課題を自ら解決する力の育成に向け、生徒指導を実践していきたい。

・**「生徒指導において家庭と緊密な連携ができている」**（87.7%）＜R4 98.0%　R3 97.9%＞が大きく下がった。決して低い値ではないが残念なことである。今後も「できること、できないこと」という限界設定をしながら学校側の考えや目的を丁寧に説明し理解を求め、保護者との連携を深めていきたい。

「生徒自治会活動を通じて、生徒が民主的な手続きを経て、主体的に活動できるよう学校全体で支援している」（86.4%）＜R4 75.0%　R3 82.6%＞は大きく向上した。これは、生徒の行事に関する満足度にも繋がっている。引き続き、生徒の主体的な活動をベースとした行事運営を通して、クリエイティブな力の育成を図っていきたい。

・**「本校の校内研修は、質・量ともに充実している」**（80.7%）＜R4 75.0% R3 82.6%＞が昨年度から5.7ポイ

ント向上し、一昨年度並みに回復した。今後も「効果（満足感）　＞　負担」が実感できる研修に向け、内容を精選しながら「為になり、今後に生かすことのできる研修」や「自発的な研修」を進めていくことが大切である。

・**「桜塚高校では生徒同士や教職員相互、生徒と教職員間で挨拶が自然に交わされている。また、外来者に対してもきちんと挨拶ができている。」**（71.2%）＜R4 82.7% R3 80.4%＞が下がった。教員相互の信頼関係、教員と生徒の信頼関係、生徒同士の信頼関係が挨拶の根幹である。教員同士、そして教員から生徒に対し心のこもった挨拶が自然に交わされ、温かい空気が溢れ「生徒の心が育つ」学校をめざしていきたい。

＜今後の課題として＞

・学校が抱える課題の複雑多様化や新陳代謝が進む中、「オール学校」での課題解決や改革をおこなっていく必要がある。そのためには、教科や分掌を横断した組織力アップに向け、首席が軸となりながら、風通しの良い職場環境を整えていくことが必須である。その意味では、**「各分掌や各学年の連携が円滑に行われ、有機的に機能している」**（63.2%）＜R4 73.1% R3 73.9%＞が下がったことは残念であり、今後の大きな課題である。改善に向けて、まずは運営委員会の場で学年主任と分掌長が情報共有および協力・連携を行うことが大切である。同時に、担任の分掌係が責任を持ち、学年主任と分掌長のコーディネートのもと担任会や分掌会で情報を発信、全体で共有していかなくてはならない。

教育の課題が多様化し、教員個々あるいは一部のセクションだけでは解決できない課題が山積している。「チーム桜塚」という合言葉のもと、学年の繋がり、分掌の繋がり、教科の繋がりは言うまでもなく、それぞれを横断して繋がる信頼関係に基づいた有機的な組織を構築していきたい。